VISION 長崎大学病院　2015．4
長崎の医療の未来を描く
file6

病理医育成と遠隔診断の構築

患者の体から採取された病変や細胞などを分析して診断する病理医は、診療の中で重要な役割を担う。しかし本県の病理医の平均年齢は 60 代。病理医不足に直面する。本院病理部は将来を見据えて、IT 技術に注目した病理診断の可能性を探っている。

病理医のダブルチェックが必要

「これは、どう判断しましたか？」。病理診断科・病理部長の福岡順也教授は、連結された顕微鏡をのぞきながら質問した。周りには十数人が同時にレンズをのぞく。福岡教授の手元のスライドが次々と交換され、ディスカッションが続いた。「ローグレードだと判断しましたが…」「これはボーダーだね。ハイグレードになるポテンシャルがありますね」。何人かが意見を述べ、福岡教授は解説を添える。複数の目で１つの検体をしっかりと診る。時に「臨床の先生と今のディスカッションを話してみて」と指示を出すこともある。

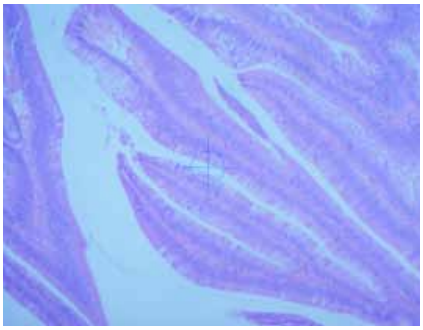
診療の中で病理診断は治療の方針を決める大切な役割を担う。細胞診断や生検組織診断、手術中の迅速診断など、より良質の医療を提供するためには欠かせない。高齢社会を迎え、がん時代といわれる昨今では良性かがんか、病理診断は特に重要度を増している。「病理医同士でのダブルチェックは必要」と福岡教授は断言する。これまでは病理医が１人で診断することが多かった。その背景には病理医の数が圧倒的に少ないという問題がある。今年３月、年間約 5000 件の病理検査を担ってきた長崎県病院企業団の病理検査部が閉鎖した。現在、県内で病理専門医として登録している医師は 26 人で、60 代が中心である。病理医がいる病院も少なく、開業医は検査会社に出すことがほとんどである。若手の病理医不足は本県の医療が抱える課題でもある。

そんな中、福岡教授は質の高い病理医育成を念頭に入れている。学生の早い段階から病理診断ができる人材を育てることである。「病理を基礎だと思っている医師たちが多い。しかし病理の現場は100％が臨床。臨床医との連携を強めて最終診断ができるように意識を変えていきたい」と強調する。

一人前の病理医になるためには解剖の経験数などを重ねて、研修医時代から約 10 年はかかるという。現在、病理部に足を運ぶ医学生や大学院生は多く、すでに医学部と歯学部の学生５人が病理医を目指しているという。

病理の世界に興味を持ってもらうよう、若者に魅力を伝えることも大切な“仕事”のようだ。

福岡教授自身、病理医を目指した理由の一つに「細



胞分布を前にして、この患者さんに何が起こっているんだろうと思うと追究したかった。やりたいことを最後まで追究できる病理が性に合った」と振り返る。病理の診断精度を上げること、オンタイムで診断ができるようスピードを上げること、常に高いハードルを課してきた。道は間違っていなかったと確信している。

手術室での術中の迅速診断をリモートを駆使してダブルチェックできないか、あるいは外来でサンプリングした検体をわずか 10 分程度の時間で細胞診断できないか、医療の効率化や患者への負担軽減なども視野に入れ、病理医としてできる最高の医療の姿を追い求める。

IT 使った病理診断の可能性

病理診断科・病理部はこれまでに IT を使った他大学との連携を進めてきた。神戸大学や淡路医療センター、または県内の長崎記念病院などをインターネットでつないで画像を見ながら症例を診断できるシステムだ。より判断が難しい症例になると、世界中の病理医たちへ意見を聴くこともできる。また出産、育児で職場での勤務が難しい病理医も参加できるような体制を整えた。個人情報の取り扱いにも気を配りつつ、IT を駆使した病理診断の可能性を探っている。「このシステムをさらに発展させて運営できれば。きっと本院をはじめ、地域全体のメリットにもなる」。本県の医療事情や地域全体を見据えながら、福岡教授の構想は広がる。県内の地域病院の病理診断を担い、さらには長年病理診断を担ってきたベテランの病理医の力も借りつつ、若手を育てるシステムを構築したいと考えている。

６大学とともにミャンマーの医療支援でも、長崎大学は病理医を派遣するなど病理診断センターの設立を担う。「長崎はサポートしてくれる人たちが多いと思う。大学も病院もリーダーが魅力的で、まとまりがとてもいいと感じている」。

思い描く構想は絵に描いた餅ではない。実績を積み上げながら、着実に実現させている。若者を引っ張る牽引力とバイタリティーあふれる福岡教授の独創性が病院に変化をもたらしている。

連結された顕微鏡で検体をみながら、ディスカッションする病理部のメンバーら